

3 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査

縞葉枯病抵抗性品種におけるヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移

(1) 目的

近年増加しているイネ縞葉枯病に対して、媒介虫であるヒメトビウンカの薬剤防除とともに抵抗性品種の作付けを推進している。しかし、縞葉枯病の発生は、抵抗性品種の作付けが多い県南部で多く、同地域でのヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス（以下RSV）保毒虫率も年々上昇している。そこで、抵抗性品種の縞葉枯病抑制効果を確認するため、抵抗性品種作付けほ場内におけるヒメトビウンカのRSV保毒虫率等を調査する（H25, 26 継続）。

(2) 方法

① 調査場所

下都賀郡内の2地点（地点Ⅰ：栃木市大平町真弓 地点Ⅱ：下野市小金井）

② 調査ほ場の概要

場所	地点Ⅰ		地点Ⅱ	
	栃木市大平町真弓		下野市小金井	
品種	コシヒカリ (罹病性)	あさひの夢 (抵抗性)	コシヒカリ (罹病性)	とちぎの星(H25) あさひの夢(H26) (抵抗性)
移植日	5/18(H25) 5/24(H26) (早植)	6/15(H25) 6/14(H26) (普通植)	5/3(H25) 4/27(H26) (早植)	6/16(H25) 6/16(H26) (普通植)
箱施用剤	ダントツ箱粒剤	プリンス粒剤	ダントツ箱粒剤 (H25) アドマイヤー-CR箱 粒剤(H26)	プリンス粒剤 (H25) フェルテラチェス 箱粒剤(H26)
RSV保毒 虫率※	11.8%(H25) 16.7%(H26)		10.0%(H25) 14.6%(H26)	

※5月下旬に調査ほ場近隣の二条大麦よりヒメトビウンカ幼虫を採集し、簡易ELISA法で検定

③ 調査内容

ヒメトビウンカRSV保毒虫率

④ 調査期間

平成25、26年6月～9月

⑤ 調査方法

ヒメトビウンカのRSV保毒虫率は、各ほ場から採取したヒメトビウンカを柴ら(2013)による簡易ELISA法で検定し、算出した。検定頭数は、一部採取数が少ない時期を除き、96頭以上/ほ場とした。調査は6月上旬から2週間間隔で実施した。

(3) 結果及び考察

地点Ⅰの罹病性品種の保毒虫率は、飛び込み時期の6月上旬は高く、6月下旬から7月上旬にかけて下がり、7月中旬以降再び上昇し、その後低下した(図1)。地点Ⅱの罹病性品種でも6月下旬と7月上旬は低く、その後は上昇を続けた(図2)。

一方、地点Ⅰの抵抗性品種の保毒虫率は、罹病性品種のような極端な上昇は見られず、9月中旬まで5%前後で推移していたが、9月になると保毒虫率が10%を超えることもあった(図3)。地点Ⅱでは8月上旬に大きく上昇したが、その後は下降し、10%前後で推移していた(図4)。地点Ⅰ、Ⅱともに保毒虫率は数値の大小はあれど、増減の傾向は2か年とも同様であった。

以上の結果より、抵抗性品種を作付けすると保毒虫率の上昇は罹病性品種を作付けするより抑えられるが、保毒虫率は極端な低下や上昇はせず一定の割合で推移する傾向が認められた。その原因として周辺ほ場の罹病性品種からの飛び込みが考えられ、抵抗性品種の作付割合や、罹病性品種と抵抗性品種の混在による影響についても検討する必要があると考えられた。

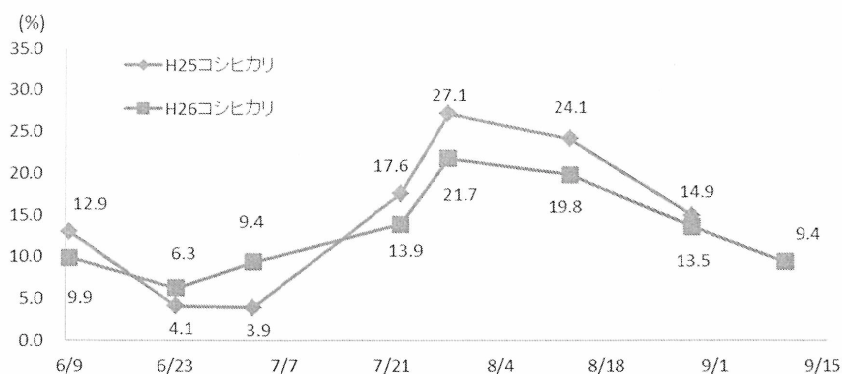


図1 R S V保毒虫率の推移(地点I・罹病性品種・早植)

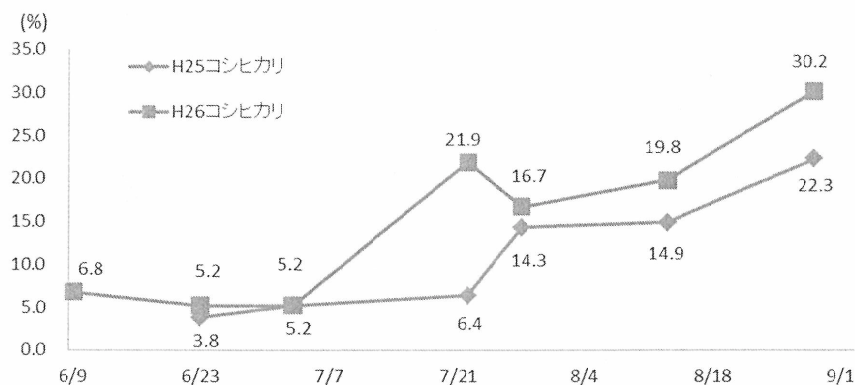


図2 R S V保毒虫率の推移(地点II・罹病性品種・早植)

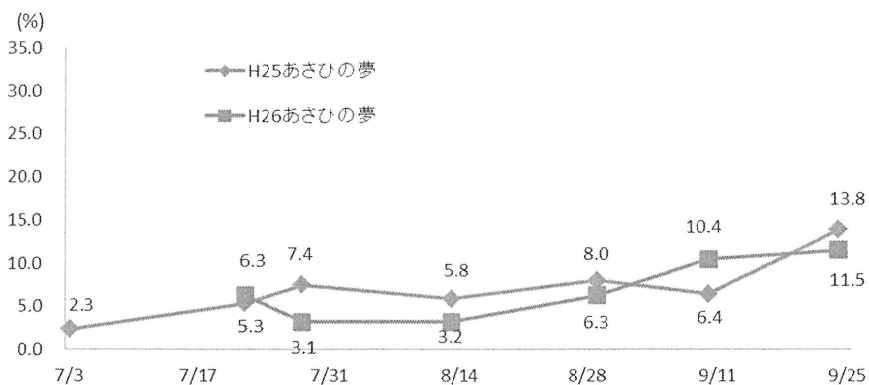


図3 R S V保毒虫率の推移(地点I・抵抗性品種・普通植)

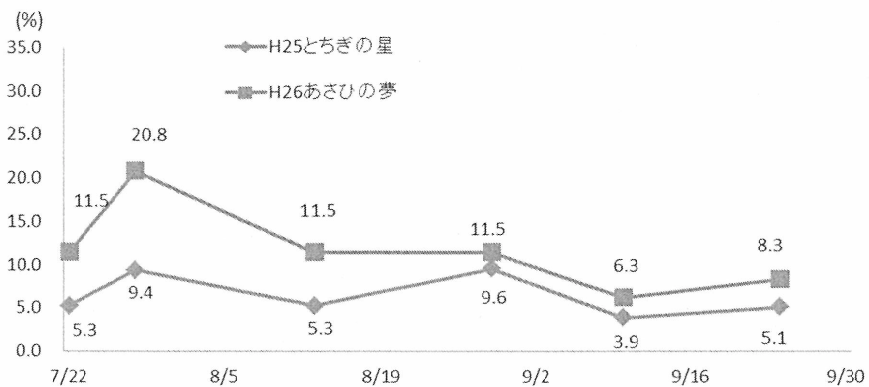


図4 R S V保毒虫率の推移(地点II・抵抗性品種・普通植)